

今週のメニュー

■トピックス

◇塩ビを巡る世界の動向：トルコ編

■随想

◇古代ヤマトの遠景（76）－【初代倭王の本当の諡号】－

信越化学工業（株） 木下 清隆

■編集後記

■トピックス

◇塩ビを巡る世界の動向：トルコ編

オリンピック等で最近ニュースの話題として取り上げられることが多いトルコですが、この4月、イスタンブールで開催されたセミナーで発表された興味深い情報を紹介したいと思います。

セミナーのゲストスピーカーである市場調査会社 I H S 化学部門のアナリストによれば、2012年における塩ビ樹脂の世界需要は3,740万トンあり、市況的には、欧州など厳しい地域もあるものの、インフラ整備が伸びている ASEAN などあれば、米国は上向いているとの報告があり、他の樹脂に比べ、塩ビは価格優位性があることから今後も伸びると予想されています。

VEC は、当協会が広報活動の一環として取り組んでいる展示会出展参加や PVC デザインアワード、出前授業などについて紹介を行い、参加者の関心を誘いました。一方、欧州からは、Vinyl Plus で取り組んでいるリサイクルの近況の報告や欧州の近年の自動車に使われる塩ビの話題が取り上げられていました。Autovinyl (the Association for Developing the Recycling of PVC in the Automobile Industry)によれば、プラスチックの利用量は、1965年2%であったものが1984年8.5%、最近では18%と急激に増加しているとのこと。なぜ、プラスチック（特に軟質塩ビ）が自動車にとって魅力的な材料なのかというと、硬質、軟質とも自動車の性能と効率を改善することにおいて重要な要素となる耐久性と軽量さが評価されるためとしています。ECVM の推定によれば、平均的な自動車には150kgのプラスチックが使われ、そのうち3~10%が塩ビであるとのことです。

地元トルコの塩ビ状況について触れますと、トルコ国内の塩ビ需要は、85万トンですが、国内生産はわずか16%、その他は世界各地からの輸入に頼っています。



Deceuninck 社のプレゼン資料より

そのような事情もあり、押し出し工程や製品のオフカット品は100%がリサイクルされています。また、欧州でトップ3に入るといわれるトルコの塩ビサッシメーカーによれば、トルコの窓枠は、塩ビが7割、アルミが2割、木製が1割弱という構成になっていて、シェア構成は安定しているとのこと。また、塩ビ建材として、塩ビサッシ、ドアばかりでなく、テラス、ロールシャッター、サイディングといった建物のいたる部分に塩ビが使われていることなどの紹介があり、日本よりも積極的に利用されていることに感心させられました。

欧州の塩ビ協会である ECVM が主催するこのようなセミナーは、毎年4月ごろ、欧州各地を巡って塩ビ関係者を集め開催されており、現地の新鮮な情報を得るいい機会になっています。

■ 随想

◇古代ヤマトの遠景（76）－【初代倭王の本当の諡号】－

信越化学工業（株） 木下 清隆

前々回の検討から、初代倭王と目される人物の名称が明らかとなってきた。その名は、「櫛玉饒速日命」と言う。しかもこの人物は天神の子と認められている。当然。皇統に繋がる人物のはずである。ところが、前回検討した、皇統譜に櫛玉饒速日命なる命は登場せず、代わりに天孫の子として「天照国照彦火明命」なる命が登場してきた。天孫の子とは、天照大神に繋がる子孫のことである。片や天神の子、片や天孫の子ではあるが、この両人は一応記紀上では無関係となっている。しかし、考えてみれば初代倭王饒速日命は、記紀の記述から、どう見ても皇統に繋がる人物であることは明らかである。であれば、皇統の記述に出てくる、火明命は初代倭王でなければならないことになる。即ち、

初代倭王 = 天照国照彦火明命

である。この関係と先に導いた、

初代倭王 = 櫛玉饒速日命

なる関係から、

初代倭王 = 天照国照彦火明櫛玉饒速日尊

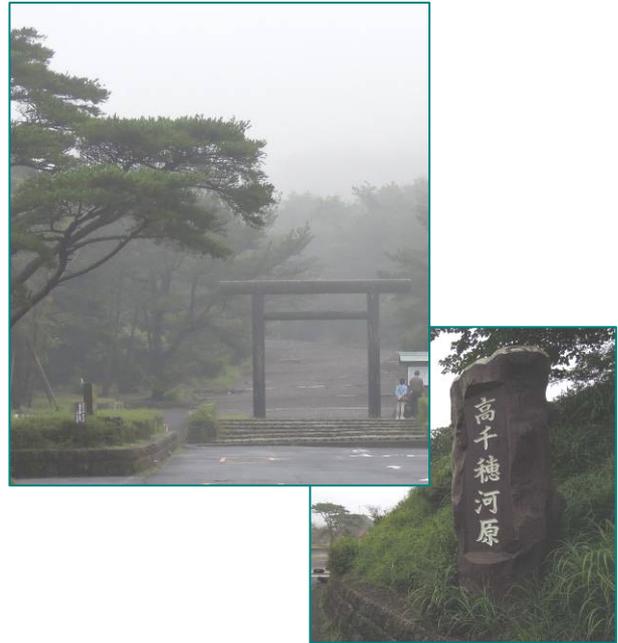
なる名称が導かれることになる。これは随分長い尊号であるが、これこそが、初代倭王に贈られた諡号であろうと考えられる。贈られたのは欽明・敏達天皇の時代であるところでは想定しており、その理由については本稿(73)【初代倭王の名称】の冒頭でほんの少し触れたが、詳しい説明は稿を改めて行うことにする。

欽明時代に『帝紀』『旧辞』が作成されたとする考え方は既に定説と成っているので、帝紀がその後、加筆修正される中で、この「天照国照彦火明櫛玉饒速日尊」なる尊号は、記載されたと想定される。天孫降臨の神話が創作された時代を持統朝とすると、降臨した天孫の名称が「天饒石国饒石天津彦火瓊瓊杵尊」と、甚だ長名になっている理由も明確となる。要するに記録に残されている「天照国照彦火明櫛玉饒速日尊」に負けない長さにしななければならないと言ったことである。このニギノミコトの長い尊号が書紀に残されていると言ったことは、ニギハヤヒノミコトの尊号も同程度に長かったことを意味している。

このように見てくると、『帝紀』『旧辞』に「天照国照彦火明櫛玉饒速日尊」なる尊称が記載されていたことは、先ず、間違いの無いことだと言えよう。なお、この諡号は長名で標記が厄介なので、必要な場合を除き、今後は「饒速日尊」を略称として用いることにする。

このように長名の饒速日尊の尊称が、饒速日命と火明命の検討から明らかになったと言えるが、この尊称は、実は昔から知られていたものであり、その名は『先代旧事本紀』に記載されている。

『先代旧事本紀』は九世紀後半に編纂された歴史書である。中世においてその評価は高く『古事記』『日本書紀』と並び「三部の書」と評されたが、近世に入ってからはその内容に疑義が出され、偽書とされるに至った。しかし、現代においては、その評価が見直されて来ているようである。内容のかなりの部分は書紀等から引用されているが、独自の内容もかなり含まれている。



高千穂河原（高千穂峰への入口）

饒速日尊の尊称は『先代旧事本紀』の天神本紀、天孫本紀に出てくるが、古来、この尊称については造作と見なされており、特定の一神を表すものではないとされて来ている。要するに、火明命に饒速日命を付会した神名であり、この二神は別神であるとの見解である。このような見解については、『日本書紀』（岩波書店）の頭注に、

「旧事紀、天孫本紀に“天照国照彦火明櫛玉饒速日尊、亦名天火明命”と見え、天忍穗耳尊が栲幡千千幡姫を妃として儲けた子とするが、これは記伝に言うごとく、し

いて天孫に付会した造作で、天神ではあるが世系の明らかならぬ神である。」

（二〇八p）
と明快に別神付会説が支持されている。

ここで「記伝」とは『古事記伝』のことで、本居宣長によって著わされた古事記の注釈書である。この『古事記伝』は全四十四巻にも及ぶ宣長の畢生の名著であるが、この中で、宣長は明確に付会説を展開しており、この『日本書紀』（岩波書店）の頭注もその見解を踏襲していることになる。

宣長の主張は、細部に亘っているが、その主要な主張は次の三点である。その原文と意訳した文、（ ）内とを以下に掲げる。

1. 旧事紀に、此の天火明命と、神武の段に見えたる饒速日命とを、一神として、名を天照国照彦火明櫛玉饒速日尊と云ひて、尾張連と物部連とを一つに、此の神の後とせるは、いみじき偽説なり。

（『先代旧事本紀』に、この天火明命と、神武天皇の段に登場する饒速日命とを、付会して一神となし、その名を天照国照彦火明櫛玉饒速日尊と云い、尾張連・物部連を一つにして、彼らをこの神の後裔とするのは、とんでもない偽説である。）

2. 饒速日命は、物部連の祖とこそあれ、尾張連の祖と云ることなし。又姓氏録にも、同じ神別ながら、火明命の子孫なる氏々は、皆天孫の部に収れ、饒速日命の子孫は、ことごとく天神の部にありて、明白く分れたる物をや。

（饒速日命は、物部連の祖ではあっても、尾張連の祖と云うことは無い。また、『新撰姓氏録』にも、同じ神別の中の天孫の部に、火明命の子孫は記載されているが、饒速日

命の子孫は、皆天神の部に収められており、明らかに両氏は異なっている。）

3. 抑旧事紀と云書、すべては、かくばかりの偽りを構へたる書には非るを、此れは物部連の人の、己が始祖を尊くせむ為に、饒速日命を天火明命なりと、偽り造れりし、家乗のありしを、^{ミダリ}漫に取て、^{ソノママ}其隨に記せる物なるべし。
(そもそも『先代旧事本紀』なる書は、すべてこのような偽りを述べた書ではないが、これは物部連の人々が、自分達の始祖を尊くするために、饒速日命は実は天火明命であると偽った家伝を、よく吟味もせずに掲載したからであろう。)

以上が、本居宣長の主張の要点である。これをまとめると、

- A 尾張連と物部連は基本的に異なった氏族であり、彼らの始祖である火明命と饒速日命とを付会して一神にするなど、とんでもない間違いである。
B このようなことが起きたのは、物部氏が自分達の始祖を尊くするために、やったのであろう。

ということになる。このような、宣長の説が現代においても受け継がれていることは、先に示したとおりである。

ところが、この宣長の説は大きな問題を抱えている。

- ① それは、尾張氏と火明命との結びつきは[前回 \(75\)](#) に指摘したように、古事記には無く、日本書紀において、急に出てきたものである。従って、書紀の最後の仕上げの段階で急遽創作された、関係と言える。従って、宣長の主張Aは成り立たないことになる。
② 次の天孫と天神の問題であるが、『新撰姓氏録』において、各氏族の祖神は、「皇別」、「神別」に大きく分けられ、神別は更に「天神」「天孫」「地祇」に分けられている。物部連の祖神、饒速日命は天神に分類され、尾張連の火明命は天孫に属している。神別の記載順序は、天神が最初であるところから、饒速日命の方が、火明命より格上だと言うことになる。であれば、物部氏が格下の火明命に擦り寄る理由など全く無いことになる。このような理由から、宣長の主張Bも成り立たないことになる。

以上のように、本居宣長の説は成り立たないとするなら、初代倭王の尊称はやはり「天照国照彦火明櫛玉饒速日尊」だったということになる。その尊称がその後、火明命と饒速日命に分解され、その尊称と共に、初代倭王の存在は抹消されたのである。

(つづく)

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いに存じます。>> [\(筆者\)](#)
「古代ヤマトの遠景」: [バックナンバー](#)

■ 編集後記

今年の1月に東京で大雪が積もった時に家内が手首を骨折しました。その後、近くの病院にリハビリに通い、ようやく普通の生活が出来る様になりました。スポーツ選手が怪我をされて、シーズンを棒に振りながらも懸命に復帰されて活躍される方を拝見すると、表舞台の裏でたゆまぬ努力をされて来られたものと感服しています。何処の世界でも、コツコツと積み上げて行く努力があつて、前を向いて進めば、運と機会が巡り、活躍の場が広がって行くものと思います。ちなみに、リハビリをサポートした努力で、濡れ落ち葉にならずに済みそうです。(円行)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp